

## ウミガメの脳、イルカの脳

市川 聡

頭骨というものは、その持ち主の特徴を良く顕わしている。そんなこともあって、野外で頭骨を見つけると、つい嬉しくなって拾ってしまう。YNAC事務所のショーケースに様々な動物の頭骨が並んでいるのもこのためだ。

さてこの中にアカウミガメの頭骨とイルカの頭骨が飾ってある。この2つの頭骨、イルカの口吻部分を除けば、さほど大きさは変わらないのであるが、その中身が全く異なっている。イルカは頭骨の大部分が脳のスペースで占められているが、カメの方は大部分が首の筋肉のスペースで、脳は親指1本分ほどの隙間しかないのである。

しかし脳の大きさをウミガメをバカにしてはいけな。カメはこの脳で2億年以上の間、食う、泳ぐ、繁殖するといった基本的な生活を繰り返してきたのである。それだけではない。屋久島で生まれたアカウミガメは、この脳で太平洋を横断しカリフォルニアまで旅をし、そこで成長してから、再び太平洋を横断し屋久島に戻ってくるのである。シンプルにして十分、これがカ

メの脳である。

彼らは、自らの生は全うするが、世の中の不条理に、心を痛めたりするであろうか？国会や領事館で、言った言わない、うそつき、大うそつきと自らの発言ですら責任を持たない人々に司られる国では、正義を思考することは人生の苦痛である。何も考えずに自分が生きることに集中するのも一つの生き方であろう。そもそもカメは万年といわれるように、100年以上は生きるという長寿の象徴のような生き物である。イルカは種類にもよるがせいぜい30~70年と言われる。長生きの秘訣は、「何も考えないこと！」なのではないだろうか。

一方イルカの方はどうであろうか。食う、泳ぐ、繁殖するといった基本的な生活を繰り返すだけではこのような巨大な脳が必要ないことは、カメの例からしても明らかである。彼らはこの大きな脳で、会話をしたり、歌ったり、遊んだりしているらしい。ゆえにイルカは知能の高い動物と言われている。

「このような知的な動物を殺すのはけし

からん！」と人間を殺すことは平気な国の人たちが訴える。自分たちと全く同じ脳を持ち、対等に反撃してくるまつろわぬものは力で粉碎し、知的ではあるが物言わぬ、ややこしくない動物は大切に庇護するのが文明人？としての生き方なのであろう。どこかの大国の傘の下で、何があってもヨイショし続ける小賢い国の統治者達は、当面自分たちだけは庇護されると信じているが、所詮限られた地球の上で1人勝ちなどありえないことを、知っているのだろうか？

さて人間である。自らを振り返ってみると、煩惱が多すぎてカメのように生きられない。イルカのように黙って庇護されるほど素直でもない。かといって文明人に成り下がるほど賢くもない。どう考えても、一部しか活用されていない脳は、日々のビールでふやける一方だ。答えの見えない現実の中で、「みんな悩んで大きくなった」のが人間の大きな脳の正体なのであろう。そういえば心の悩みが、肉付いて「脳」になったんですね。

# ニュージーランド紀行 ~つげの森を旅して~

藤村 早苗 / 岡田 愛

## 森が恋

オーストラリアのさらに南東に浮かぶ、日本の北海道と本州四国を合わせたほどの国土を持つ国ニュージーランド(NZ)。主に南島と北島からなり、南島中央を南北に走るサザンアルプスは、暖流が運ぶ温かい風をさえぎって、特に南島南西部に多量の雨を降らせる。この辺りは美しく豊かなコケにも定評があり、どこかに似ている…。うむっ黒潮が運ぶ暖かい風を阻む洋上アルプス“屋久島”にそっくりではないか。

今回、旅の目当ては“NZの屋久島”を見ることとNZエコツアーを体験すること。2002年1月、島外研修と銘打って、サナッチとオカダアイは真夏の南半球NZへ飛び立った。今号で

は、その中核ともなる世界自然遺産登録地域で見たすばらしい森と、片言の英語で奮闘する僕たちの体験記をつづる。

NZの南西部に集中している苔むした森を中心に、NZ最大面積を誇るフィヨルドランド国立公園を含めた4つの国立公園が世界自然遺産登録地域に指定されている。この2週間の旅では、自然保護省(DOC)と呼ばれる政府機関主催の1day 森歩きプログラムと、地元の会社が主催するシーカヤックツアー。そして、自分たちだけでの森歩きや、3泊4日のトランピングコース(のちに解説)にも挑んだ。今号では、それらのうちDOCのガイドウォークと3泊4日のトランピングコースをご紹介します。

DOC(Department of Conservation)  
Te Anau  
Summer Visitor Programme 2002  
"Circle Track"

まずはDOCのガイドウォークを藤村早苗がご案内しよう。

ニュージーランドにはDOCと呼ばれる国の機関がある。これは「Department of Conservation(ニュージーランド自然保護省)」の略で、「ニュージーランドの自然と歴史的遺産を保護する」ことを目的とし、国土の1/3にあたる約82000平方kmを保全地域と定め、野鳥・野生動物の保護、国立公園内のトレイル整備・管理、山小屋・トイレの保守などを行っている。

ニュージーランドの各都市にはDOCのオフィスがあり、スタッフが常駐している。そこでは地図や山小屋チケットの販売、トレイルの状況やコースタイムの案内など、ビジターセンターとして旅行者に情報提供をしている。中でも私達が一番お世話になったのは、南島南西部にある「テ・アナウ(Te Anau)」という町のDOC。ここでは夏限定の「Summer Visitor Programme 2002」というプログラムを企画し、フィヨルドランド国立公園の素晴らしい自然を紹介していた。今回私達は「サークルトラック周遊(Around the Circle Track)」と「マリアン湖(Lake Marian)へのトレッキング、「タカヘ(ニュージーランド固有の飛べない鳥)」のビデオ上映会に参加した。その中でも一番印象的だ

った“サークルトラック”森歩きの様子を、私が旅行中につけた日記より紹介しよう。

### 【DOC オフィスへ】

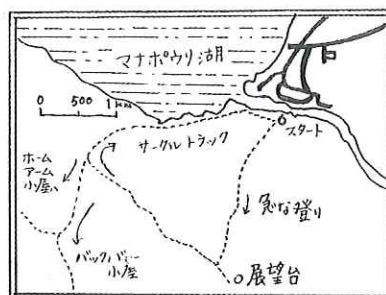
2002/1/11 昨日ユースホステルで手に入れたDOCのパンフレットに「Summer Visitor Programme 2002」という少人数制のトレッキングがあると知り、私とアイちゃんはDOCオフィスへ行ってみることにした。今日のプログラムは所要時間6時間、料金はNZ\$25(約¥1500位)、初心者向けのコース。当日の朝に押しかけ、断られることを承知でオフィスを訪れたが、快く予約を受け付けてくれた。集合場所のMana Pouri湖ま

でDOCの車で一緒に連れて行ってもらう。

### 【サークルトラック】

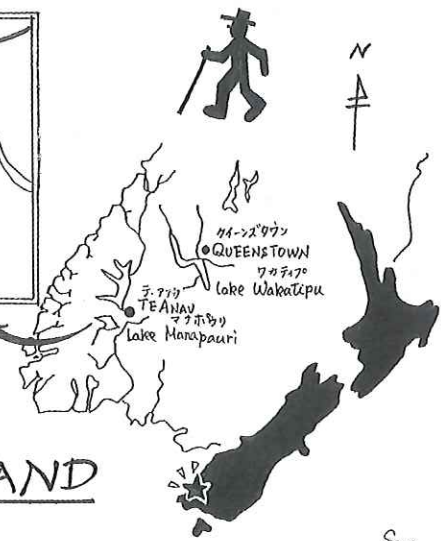
Mana Pouri湖の集合場所にはすでに60歳代のご夫婦、50歳代の女性とそのお子さん、40歳代の女性1名が待っていた。スタッフはDOCスタッフの女性2名とアシスタントの女子学生1名、そして男性1名(女性スタッフの旦那様)。そして我々を含めて全員で11名だった。全員そろったところでMana Pouri湖畔からジェットボートに乗り込み、トラック入り口まで走る。船着場に下りて階段を登り、ふと顔をあげるとそこは一面の苔の森が広がっていた。さすが雨の島と言

### サークル・トラック



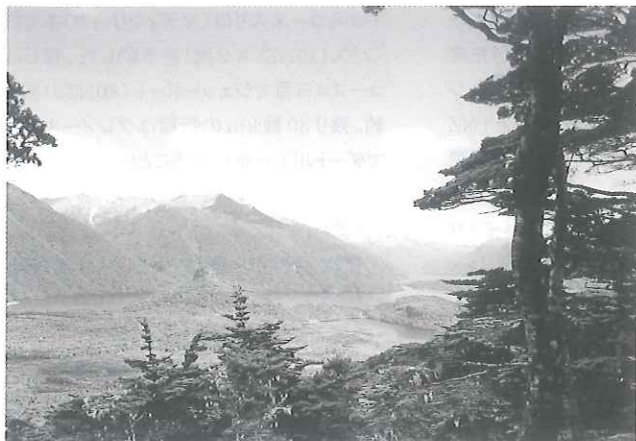
《サークルトラック》

NEW ZEALAND



Sum.

展望台にて



われるだけあって、苔の迫力は屋久島に引けを取らない。道は一人一人歩ける幅だけ残り、後は苔が林床を覆う。木々の間からこぼれる日の光がさらに苔の色を鮮やかにしていた。

### 《いざ、森の中へ》

DOC スタッフによる自己紹介、諸注意があり、いざ出発。スタッフの歩くスピードは速く、お喋りしていたらすぐ離されてしまう。しかし、苔の道がはっきりしており迷うことはなく、小走りでスタッフに追いついた。

この辺りに優先する木々は「ビーチ(Beech)」と呼ばれるナンキョクブナ科ナンキョクブナ属(*Nothofagus*)の樹木で、ニュージーランドでは5種類自生している。そのうち、ここでは「マウンテンビーチ」と「シルバービーチ」の2種類を見ることができた。

シルバービーチには時折、ヤドリギ(Mistletoes: *Praxillis colensoi*: ビーチに寄生する植物)がくっついていて足元には

目のさめるような赤い花が沢山落ちていた。DOCスタッフが足元に落ちていた蕾を拾い、指先でピンとはじくと花の先が4つに裂け、花粉をふんだんにつけたおしべが中からはじき出てきた。彼らは鳥に花粉を運んでもらうため、熟した花は花びらを開かず蕾のような状態で枝についている。そして、鳥のくちばしが触れるとパッと花がひらき花粉を吹きつけるのだ。奥ゆかしく花粉を差し出すより積極的に投げつける、というわけ。花の色もさることながら花粉の扱いについても大胆なところが気に入る、いくつも花粉を吹き付けてもらった。

急な登り坂を前にして一休み。するとDOCスタッフが「鳥の鳴き声を聞こう！」と、いって森の中に一人ずつ残し去っていった。私は苔の垂れ下がる大きな木の下にぼつんと取り残された。今までワイワイと喋っていただけに森は異様に静かに感じた。そつと森の音に耳を傾けていると鳥の様々な鳴き声が聞こえ、垂れ下がる苔一つ一つにも

マナポウリ湖畔でおはあちゃんこ



音があるかのように感じられる。

### 《展望台へ》

急な坂を登る途中、木々の間から山の稜線が見えた。「ティティロア山(Mt. Titiroa)よ。」とDOCスタッフがその山を指して教えてくれた。標高は1715m、さほど高くないように思ったが、南緯45度のこの地では真夏でも雪が残っていた。

ゼイゼイと息を切らして森を抜けるとパッと展望が開け、そこには足元に青いマナポウリ湖が広がっていた。湖を囲む山々は標高1000mを優に越え、山肌の中腹から緑の色が変わり、森林限界がラインとなってはっきり見える。アイちゃんとはその光景に吸い込まれるかのように展望台の先へ歩いていこうとした。するとスタッフに、「アイ！サナ！ストップ！！」と叫ばれた。振り返ると悲壮な顔つきでDOCスタッフ達が手招きをする。意味は解らなかつたがスタッフのもとへ戻ろうとした時、立っていた地面の下が大きくぐぐれているのに気がついた。わずかな草の根で支えられている足元を見て、足の裏がこそばゆるくなった。

### 《木漏れ日の中のランチタイム》

ジンジャークッキーとコーヒーをサービスしてもらい、皆思い思いの場所でお弁当を広げ、ランチタイムとなった。青く美しいマナポウリ湖を眺めていると、DOCスタッフの女性が60歳の女性参加者の一人と話している声が聞こえてきた。「あなたは署名したの？」「ええ。主人もよ。…何の話かな？」と思って聞いてみると、実はこの方が若い時、この眼下に広がるマナポウリ湖にダム建設の計画があり、その反対署名にこの辺りの住人と一緒に参加したという。

1940年代、ニュージーランドの会社によりオーストラリア・クイーンズランド州でアルミニウムの原料となるボーキサイトの大きな



サークルトラックを歩く

鉱床が見つかった。ニュージーランドでアルミニウムに精錬するための電力をマナポウリ湖での水力発電で調達しようとダム建設の話が持ち上がったが、景観保全の立場から反対の声があがり、1960年代後半には国じゅうの世論を巻き込む運動へと発展した。最終的には当時の総人口の約8%もの反対署名が集まったのだそうだ。小さな田舎街の美しい湖を守ろうと、地域住民が立ち上がったのだ。時代の動きに流されず、本当に大切な物は何なのかを判断し、立ち上がったマナポウリの人々。その純粋な熱き思いが国をも動かしたのだ。

——ふと、目の前の笑顔のおばあちゃんが大きく見えた。

下りも相変わらずのペース、相変わらずの賑わいで降りていった。最後に青く澄んだマナポウリ湖畔へ降りると、湖面が太陽の光を反射してまぶしかった。我々の足元には白い砂が堆積し、青い湖へとつながっていた。そして、青い湖はマナポウリの町へとつながっていた。

3Days Tramping  
"Rees Dart Track"  
リースダート・トラック

ここからはオカダアイがご案内しよう。NZには数日かかるトレッキングコースがいくつも設けてあり、歩くことを一般にはトレッキングとは言わず、「トランピング」と呼んでいる。いわゆるピークを目指す登山ではなく、「ゆっくり歩いて旅する」と言ったニュアンスの言葉だ。そのトランピングコースの中でも特に人気のある利用度の高いコースは「グレートウオーク」と呼ばれ、コースや山小屋も良く整備されている。

ただ、今回我々が挑んだリースダート・トラックはグレートではない。有名どころでグレートなミルフォード・トラックも考えたが、半年前から予約でいっぱい。そんな時、たまたまNZ政府観光局が出している「テパパ通信」でリースダート・トラックの記事が目にとまった。

**《情報収集》**

リースダート・トラックは、右図のように、ワカティプ湖に注ぐリース川とダート川の川沿いを歩くコース。両河川の支流が上流で接近しているから、リースサドルを越えると3泊4日で周回できる。NZに行くまで事前情報はこれだけの行き当たりばっ「旅」。

そして、現地NZで慌ててトランピングの

情報集めに走ったのが DOC オフィスだった。さすがにあらゆるコースの情報が充実しており、コース最寄のクインズタウン DOC でコースの地図(5万分の1)と1NZ\$の地図、トランピング案内本、簡単な図鑑数冊を手に入れた。コースは途中から世界自然遺産登録地域の一部、アスパイアリング国立公園(Aspiring NP)に入る。コース内に3つある山小屋はDOCが管理しており、事前にチケットを購入して利用の際小屋のスタッフに渡すシステムになっている。ハットチケットもDOCオフィスで3泊分(10NZ\$/1泊)購入した。

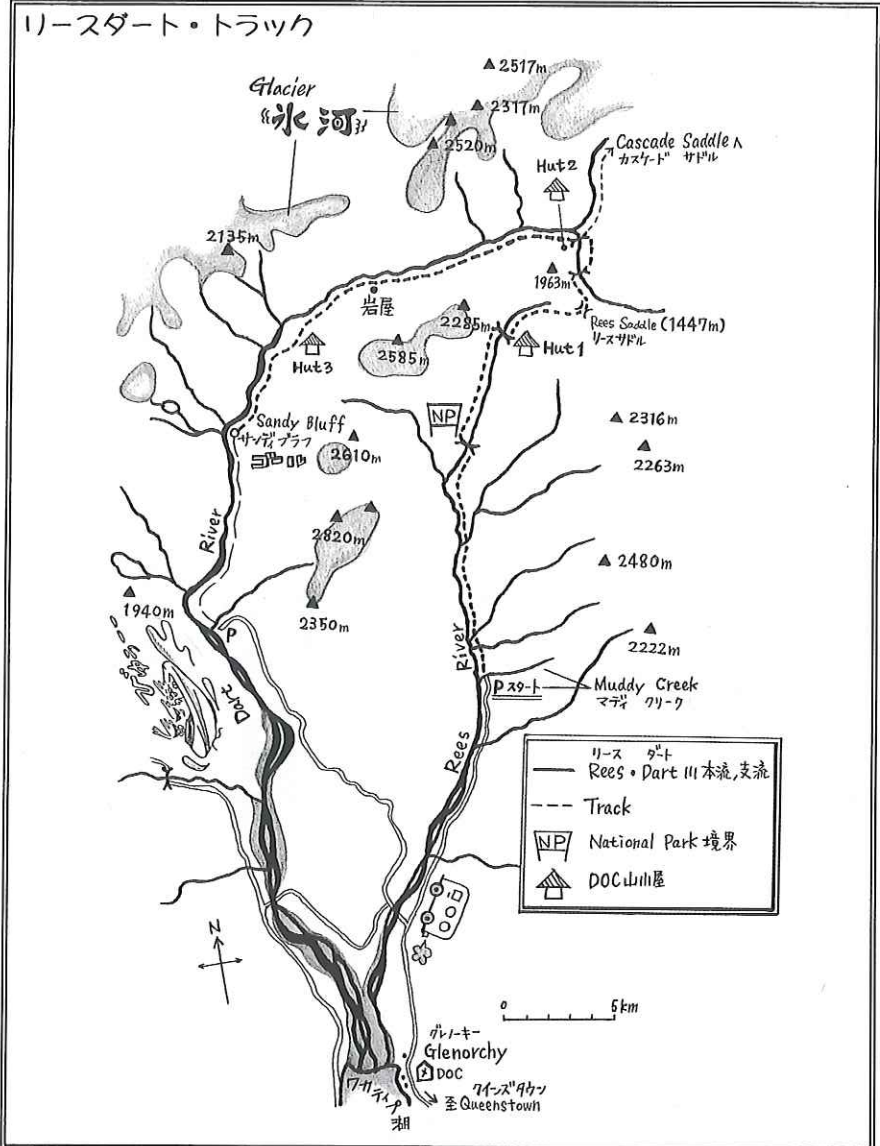
**《コースまでの移動手段》**

次はコースまでの「あし」を確保せねばならない。バックパッカーだらけの夏は大抵専門の運び屋さんがいる。DOCオフィスの横に運び屋予約センターがあり、クインズタウンからグレノーキー往復、グレノーキー

ーからコース入り口(マディクリーク)まで行くバス(15NZ\$×3枚)を予約した。帰りはコース4日目でジェットボート(80NZ\$)を予約。残り30数kmの行程はグレノーキーまでダート川で一気の下ることにした。

**《装備》**

- ①荷物:今回山小屋はマットレス水道完備
- ・シュラフ/シュラフカバー
- ・雨具/着替え/フリース×1
- ・コッヘル×2/ガスとヘッド/食器類
- ・ペットボトル/水筒
- ・地図/コンパス/カメラ/フィルム
- ・救急セット
- ②食糧:女二人だからそもそも少ない?
- ・α米 10食(夕食3・朝食2食分)
- ・2人前おかず缶2個
- ・ドライフードパスタ×2
- ・焼きしめた穀物パン2本(昼3食分)
- ・野菜パック×1/トマト/チーズとハム



・お茶付けのもと×3 食分/クッキー袋×2  
/おやつ/お茶セット/調味料

### 《山小屋事情》

- ・定員 20 名/マットレス水道完備
- ・DOCスタッフ夏季常駐
- ・1泊 10\$ (日本円で1NZ\$=60円位)
- ・収容人数 20名

トランピングコースは利用度によって山小屋の整備レベルが異なり、比較的利用度の低いリースダート・トラックは小屋の使用料も安い(高いところで1泊 35\$位)。とは言え今回泊まった山小屋は、3日目を除いて夏季だけDOCスタッフが常駐している。

何故かDOCのスタッフは女性が多い。機敏に対応する女性スタッフは頼もしく、オフィスの雰囲気も明るかった。山小屋では気象情報や道の情報など、いつでも聞けるスタッフがいてくれると心強い。

山小屋は寝室とみんなが集うキッチン兼ダイニング。そこには必ず薪と薪ストーブが置いてある。夏でも氷河をたたえる山並みを望むコースだ、無理もない。トイレも屋外にあるが、凍結しない冬季用のポットン便所+美しく清掃された簡易水洗トイレの組み合わせだ。物資は歩いて持ってくるわけにはいかないの、ヘリで運ぶ。トイレに入ると張り紙。“遠くから運ぶので大切に使うてね”ほおお無駄にできない^^。水分以外の汚物もヘリで運び出すらしい。

これは、常日頃屋久島の山小屋トイレをうらいている我々としては、NZのトイレ事情をチェックせずにはおれない。

—“Do you like toilet??”

…トイレにカメラを向けている我々を冷やかな視線が貫いたのは言うまでもない^^

### ☆リースダート・トラック日記

#### 《1日目—国立公園外》

バスを乗り継いで、ようやく午前10時マディクリーク(P)到着。この日出発するパーティは5組。短パンに“日本人魂”地下足袋を装着する僕に、不思議顔でヨーロッパ系のカップルが“What’s?”。アホな僕は“Japanese Trekking Shoes!!ハッハッハ”と超さわやか？。

ミルクブルーと言われるNZ南西部の水の色と、リース川が運ぶ光沢を帯びたグレー(片岩)の砂。遠く正面には氷河をたたえた峰を望み、前半はリース川に注ぐ数々の支流を越えては、ひたすら膝丈ほどの草原を歩く。かつて、氷河の流れが削り出したリース渓谷。スケールの大きさに1日

#### 国立公園外—川にじゃぶじゃぶ



森林限界



飽きることはなかったが、ここは国立公園の外だから？川に橋もなければ道もない。川沿いには4WDの轍がはしり、時々1m程のオレンジポールが刺してあるだけで特に標識はない。夏だからそれなりに毎日人が歩くようで、先人の踏み跡を頼りに行く。大丈夫だろうか…。

そんな僕たちをよそに、足の長い他のパーティは周りに目もくれず歩いてゆく。我々も余裕を見せたい所だが、挨拶も“Have fun!”とバカのつづき。あつという間に視界から消える。

前半は見渡す限り草原、いやその下は湿地に近い。地下足袋だった僕は膝の上まで泥につき、必殺“長靴”のサナッチも埋まる靴を引き抜こうとえいっ！ピリ!!とほほ…。

#### 《国立公園内》

初日コースも3分の2にさしかかった午後2時頃、ようやく小さな林が現れ、そこをぬけると素敵な吊り橋。渡りきると、NPの看板を境に一変して苔むした美しいナンキョクブナの森があらわれた。景観に配慮しながらも行き届いた道は、歩く幅以外はふかふかのコケで覆われている。公園内外での扱いの差に唖然としつつ、苔むした森に浸

#### 国立公園内—コケコケロード



りながら、何とかシェルターロックハット(Hut1)までたどり着いた。

この日のトランパーは合計8名。みんな我々より先に小屋に着いていたのだが、足元を見るとみんなドロドロ…。地下足袋の僕も泥んこだけど丸ごと洗えるし、長靴も含めて、Japanese Shoes はやっぱり優れていたのだった。

#### 《2日目—森林限界》

AM8時半頃、山小屋を出るといきなり道がない。リース川沿いを行けばいいはずだが…。見渡す限り片岩の風景にじっと目を凝らすと、何やら所々に石の塔(ケルン)が見える。確かに景観に馴染む違和感のない標識だが、もし倒れたらいちいち積みに来るのだろうか？

ここ標高900mはすでに森林限界となり、U字谷の両岸にそびえる2000m級の山並みを氷河が覆う。このコースの最高点リースサドル(1447m)まで、延々続く膝上ほどの灌木とガレ場。だけど、足下にはこの時とばかりに小さな高山植物が咲き乱れ、慎ましく短い夏を謳歌している。頭上では、最も高所に住むオウムの仲間が好奇心旺盛なケアが、元気な声で愛嬌を振りまいた。

リースサドルで、朝あらかじめ作っておいた手作りスペシャルサンドとコーヒーで一服したら、今度はダート川の支流沿いを本流まで下る。氷河の後退とともに残された堆積物を削った深い谷。その兩岸の台地は金色の草原に覆われ、氷河をたたえた峰峰を背景に、ダート川本流まで続く。夏でも氷河から吹き下ろす風は冷たく、この日泊まったダートハット(Hut2)は薪ストーブ始動。火があるとやっぱり和む。

この小屋は、カスケードサドルへ日帰り登山する際の発着点でもある。ここで2泊する人もいるので、泊まり客は初日より多い。

だんらんの横で炎が“ぼおお”。何だあ？見るとガソリンストーブでシュッポシュッポがんばっているお姉さんがいる。プレヒートに失敗して燃えているのだ。今回の旅では山小屋は自炊で、食材や調理器具を持参したのだが、まわりを見るとEPIガスを使っていたのは我々だけ。皆経済的でゴミを出さないガソリンストーブを使っていた。

### 《3日目ーナンキョクブナの森と草原》

3日目ともなれば、疲れも麻痺？して足取りも軽やか。ひたすらダート川沿いを歩き下る。お天気にも恵まれ、青空と氷河で白い稜線のコントラストが美しい。さらに進めば、ビーチの苔むした森と広大な金色の絨毯が交互に現れ、まさに“風の谷のナウシカ”気分。心地よい疲れと柔らかな静寂に包まれ、草原でまどろむ僕たち。

最後の山小屋は無人小屋ダーレイハット(Hut3)。とは言え中は今まで通りマットレス水道完備。今日の泊まり客は僕たちを入れて5人だけ。

3日間一緒だったヨーロッパ系のカップルは、彼が一生懸命調理にいそんでいる。いろんな国の人が集まるNZにあって、欧米文化？を垣間見た気がした。彼らとも最後にやっと片言の英語でコミュニケーションがとれた。「サンドフライ※すごいよ」とか^^

### 《4日目ージェットボートで…》

最終日は、小屋から1時間半くらいのサンディブラフまで歩き、そこからコース最寄りのグレンキーまでダート川をジェットボートで下ることにしていた。最後に苔むした素敵な森を抜けると、ミルキーブルーのダート川が眼前に開けた。「ああ終わったね」余韻に浸りながら記念撮影。船を待つ。

待ち合わせていたAM10時。サングラスの兄ちゃんが水しぶきをあげてやってきた。ジェットボートは初めてだが、川は見た目に

はそんなに深くないし川幅も狭い。大丈夫なのか？ライフジャケットを装着。僕の心配をよそに早速“Go!!!”約1時間、朝の冷たい空気を切り、若干凍え気味の軟弱な僕を背中にサナッチは大はしゃぎ。壮大な山並みをバックにかなりスリリングなボートさばきは、3日間洗っていない体の汚れを吹き飛ばす壮快な瞬間だった。

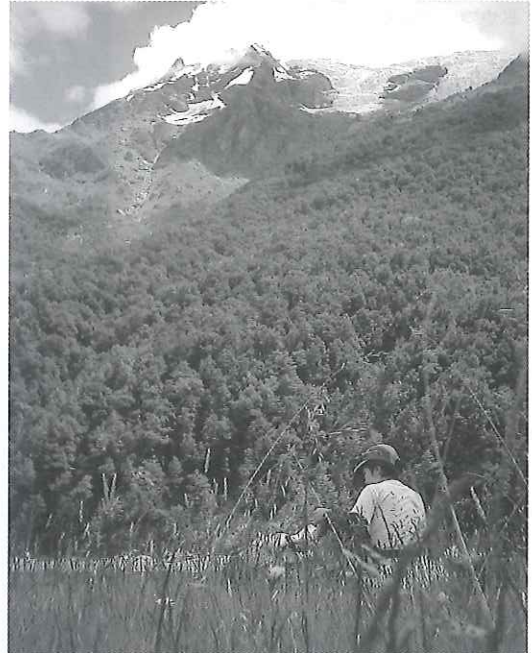
### 《まとめ》

この旅の成果の一つは、いつも森を案内する立場の私たちが「お客様」を体験したことだ。DOC スタッフは案内することを専門としているわけではないのだが、森の中で特徴ある植物に関する資料を配布したり、自然解説にも先に紹介したような工夫がなされ、NZの森に対して白紙に近い状態の私達でも基本的な森の知識を得やすいものであった。もちろん良いところばかりではないにしろ、「DOC流「森の楽しみ方」は2人で歩いたリースダート・トラックでも生かされ、あらゆる場面でNZの森を紐解く鍵になった。

もう一つは、国立公園のキメ細かい管理体制を垣間見たことだ。リースダート・トラックに至っては、先に書いたようにきれいに整備された国立公園内のトレイル。分かりやすいが、さりげない道しるべや看板。いつでも薪として利用できるよう、屋久島でいう「岩屋」(大きな岩の下などの雨宿りポイント)に常備された乾いた枯れ枝など、ぬかりない。

とは言え国立公園を一步出れば、膝上まで泥にはまったり、川をジャブジャブ渡ったり、はたまたバスの車窓から広大な牧草地を眺めていると、素晴らしい森の背後に大規模な開拓の歴史を見た。国立公園内外で明らかに異なる管理体制にはギャップを感じたが、今残された森はわずかとは言え、それらを楽しめる場所を快適に利用できるような提供しつつ、確実に守っていく姿勢に感心した。

### 草原でまどろむ



私達はこの旅を通じて素晴らしい森に出会い、様々な人々の親切に支えられ、沢山の思い出を胸に屋久島へ帰ってきた。そして再び屋久島の森を歩いたとき、森に対して見方が少し変わったような気がする。

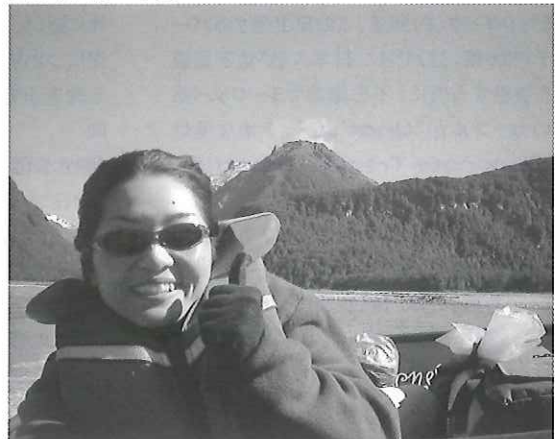
### ＜参考文献＞

- I「地球の歩き方⑩ニュージーランド 2002～2003」ダイヤモンド社 出版
- II「ニュージーランドの大自然を楽しむ本」一決定版 河出書房新社
- III「Tramping in New Zealand」lonely planet

### ※サンドフライ：

ヌカカに近い生き物。NZの名物害虫で、刺されるとめっちゃくちゃ痒い。

### ジェットボートで…



…これはオカダアイであ



正面図

# おたまじゃくしを育ててみました

鷲尾 紀子



正面図

ひょんなことから、おたまじゃくしを育てることになった。栗生のタイドプールに、おたまじゃくし(以下:おたま)がうじゃうじゃいたのだ。何ガエルのおたまなのだろう? 「わっしー、これ持って帰って何ガエルになるか育ててみる。」松本さんから指令が下る。とりあえず9匹拾う。小さなおたま達。「ふ〜ん。」私のおたま飼育の始まりはこんなに無感動であった。

事務所に戻っておたま達をその辺にあった透明ビニールパックにとりあえず移す。ここで初めておたまの顔をじっくり観察する。正面から見ると、妙に離れているつぶらな瞳と、なぜかにんまりと笑いながらぱくぱくさせている口元がなんともいえない。…かわいい。早速水槽を買ってきて、おたま達を移す。餌は金魚の餌をすりつぶしてせつせと与えた。毎日、おたまのノーテンキそうな顔を眺めているだけで心が和んだ。にんまり顔でおしりからぶらぶらとうんちをぶらさげているのすら、かわいく見えてしまった。

おたまを拾ってから16日目、一番大きなサイズのおたまから足が出ているのを発見。体の大きさから比べると物凄く小さくて細いが、確かに足がぶらんとついていた。こいつを「ジャイアン」と名付けた。続いてもう一匹、足が出てきた。こいつは「野茂」と命名。どちらも他のおたま達よりも大きな体をしているので、大きそうな名前を付けた。ジャイアンも野茂も、足こそ出ているがやはりおたまで、あいかわらず何も考えていないようなにんまり顔でぱくぱく餌を食べて、うんちをぶらつかせていた。

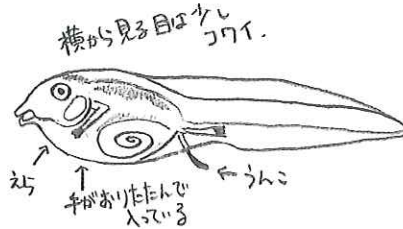
そんな彼等に変化が出たのはそれから5日後の夜だった。様子がおかしいのだ。



なる。

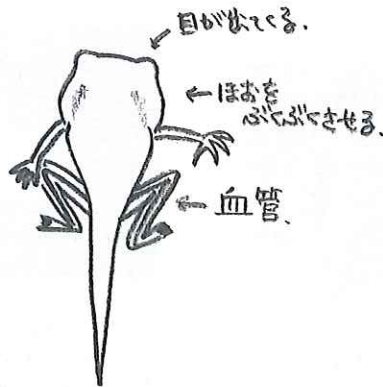
そして、翌朝。なんとこの2匹に右手が

出ているのを発見! 左手はまだ皮の下に折りたたまれた状態に入っているが、



そこが少し膨らんだ感じになっている。夕方ツアーから帰ってくると先に野茂の両手が出ていた。そして、寂しいことにあのキュートなおたま顔はずっかり大人びたカエル顔へと変貌を遂げていた。水に浮いている野茂に顔を近づけると私の顔が恐ろしかったのだろう。あわてて水の中へと逃げていった…とその時、彼の口から泡が!!! 肺呼吸を始めようとしているのか?! 水中ではまだ口をぱくぱくさせているので、エラ呼吸もしているよう。しかし彼は着実にカエルに変わろうとしていた。水槽のなかに陸を作ってやる。

翌日の夜22:00、3番目に足を出した「鈴木君」(この変までくると、名前の由来



にあまり意味はない。)にも変化が出てきた。色がやはり白っぽくなって、右手の肘が皮の中でぱんぱんに突き出ている。野茂、ジャイアンの手が出てくる瞬間を見逃した私としては、なんとしても鈴木君の手が飛び出す瞬間を見たかった。じーっと観察を続ける。22:47、皮の中で手を動かす。あと少しか?

鈴木君の手が出てくるのを待つ間、まあい顔もすっかり三角になってしまい、陸へと上がっている野茂にちよっとイジワルをして、わざと水の中に落としてみた。

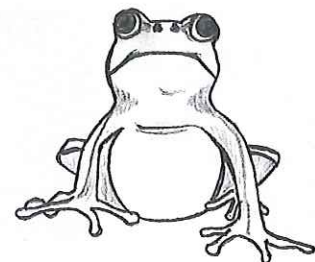
水に落ちた野茂はかなりあわてて陸を求める。もうエラ呼吸はしていないようだ。尾びれもすっかり短くなってしまって、ほんのちよこつとしか残っていない。なんとこの尾びれ、細胞が自殺をしてどんどん短くなるのだ。「死んだ細胞は分解され、血流に乗っておそらく肝臓などで再吸収されているらしい。そして、変態時に消失する器官は変態最盛時には絶食しているおたまの栄養となり、また新たに作られる器官の成長にも重要な役割をしているそうだ。」

23:55、眠くなってきた。鈴木君の手は出そうでない。まだかー! とがまんできず、つい鈴木君の皮の下でぱんぱんに突っ張っている肘を触ってしまった。そしたら、びよ〜んと手が皮を突き破って飛び出してきた!!!

まるで手が飛び出すのが合図かのように、そこからおたまの変貌は感動的にすさまじい。破れた皮は手と融合する。そしてぐんぐんと尻尾が短くなり、泳ぐのに手足を使うようになる。顔も痩せていって大きな目がつき出してくる。ウエストがくびれ出すころには吸盤を使って上陸してくる。「この変態スピードも水温により早まったり遅かったりするらしい。」

そうしてカエルになってしまうと、もはや金魚の餌など食べてはくれない。そう、カエルは生きて動くものしか食べないのだ。そして、蠅を捕まえ、生ゴミからウジをかき集めるという私の苦労が始まるのだった。このおたまはニホンアマガエルでした。

なお、文中の変態時における消失する細胞の働き、変態の早さ等についてはカエルの研究をしている宮形佳孝さんから頂いた情報である。



# 屋久島のキンチャクダイ科の魚類

松本 毅

## はじめに

YNAC 通信12号でチョウチョウウオ科の魚類について書いたが、今回はキンチャクダイ科の魚類についてまとめてみる。

チョウチョウウオ科とキンチャクダイ科はあでやかな姿が似ているのでよくセットにして語られる。かつては同じ仲間の魚類として扱われてきたこともあるが、現在は分類上別の科として扱われている。外見的には、鰓蓋の下方にある刺の有無で見分けることができる。刺があるのがキンチャクダイ科の仲間である。生態的には、チョウチョウウオ科の魚類は性転換しないが、キンチャクダイ科の魚類は性転換をする種が見られることや、チョウチョウウオ科では、雌雄や幼魚成魚で模様異なることはないが、キンチャクダイ科では、雌雄で模様の異なる種や、幼魚と成魚とで模様が異なる種があることも特徴である。しかし、少し魚類に見慣れてくると体の感じでチョウチョウウオ科かキンチャクダイ科の魚類であるかはなんとなく見分けがつくようになってくる。

さて、今回ここに紹介するキンチャクダイ科の魚類は6属13種類である。日本産のキンチャクダイ科は7属28種とされているので、屋久島で見ることができるのは半数以下である。チョウチョウウオ科が日本産の65%であったのに対してキンチャクダイ科が46%というのは、いやに少ない気がする。

## キンチャクダイ属 *Chaetodontoplus*

キンチャクダイ属は日本では4種いるが、屋久島では1種も見ることができない。キンチャクダイは、東京にいた頃よく水槽で飼育していた私にとってなじみの深い魚であるが、屋久島にはいないのですっかりご無沙汰している。温帯種が中心の属であるが、唯一熱帯種のチリメンヤッコはいつか屋久島でもお目にかかるのではないかと考えている。

## サザナミヤッコ属 *Pomacanthus*

サザナミヤッコ属は日本産5種の内2種が確認されている。大型で色彩も鮮やかな美しいグループである。

### タテジマキンチャクダイ *Pomacanthus imperator* 普



幼魚

成魚

屋久島では岩礁域で成魚は普通に見られ、幼魚はタイドプールで見ることができる。幼魚は「渦巻き」といわれ成魚とは模様が異なる。よく幼魚を飼育飼育して成魚の模様にならっていくのを楽しみにしていたが、成魚の模様が出てくると今まで仲良くしていた仲間同士が喧嘩をはじめ、とうとう一番大きいものが他のものを殺してしまうという自然界の厳しい掟を見せ付けられることになった。

### サザナミヤッコ *Pomacanthus semicirculatus* 普



幼魚

成魚

小学校PTAの浜で歩いて40cmほどのサザナミヤッコを突いてきて刺身で食べたのを思い出す。新鮮な魚を浜で料理をすればどんな魚もうまいのではないかと思った。成魚は好奇心が強く潜っているとちよろちよろと様子を見に近づいてくる。しかし、こちらが近づくと慌てて岩陰に引っ込み「グウーグウー」と鳴いて怒り出す。

## タテジマヤッコ属 *Genicanthus*

キンチャクダイ科の中では少し他とは違った体形をしている。チョウチョウウオというよりもスズメダイに近い形をしている。また、この属だけがプランクトン食であったり、オスとメスで模様が異なるのも特徴である。このグループは日本産4種の内3種を屋久島で見ることができる。

### トサヤッコ *Genicanthus semifasciatus* 少



オス

メス

永田灯台や口永良部の潮通しの良い水深20m以深で見ることができる。雌性先熟(先にメスとして成熟した後にオスに性転換する)でハーレム(一匹のオスが数匹のメスを支配する)を形成するといわれているが、屋久島ではペアでいるのは見たことがあるがハーレムを確認したことがない。屋久島での個体数が非常に少ないためであろうか。

### タテジマヤッコ *Genicanthus lamarck* 少



オス

メス

トサヤッコと同じく、潮通しの良い水深20m以深で見ることができる。この種も雌性先熟でハーレムを形成するといわれており、オス一匹にメス数匹というハーレムを確認したことがある。トサヤッコよりも確認頻度は高く、個体数も比較的多いようである。

### ヤイトヤッコ *Genicanthus melanospilos* 少



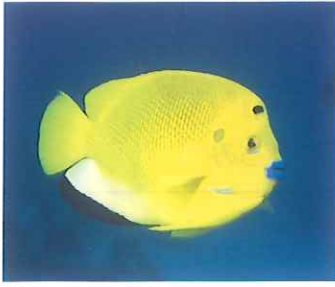
以前、見たことがあったのだが本種であるかどうか確認できなかったのが本リストから外していた。しかし、この原稿を書いている途中で本種の写真を撮る事ができたので急遽追加した。20m以深にいたので浅い水深でのダイビングが好きならあまりお目にかかる機会が少ない。



## シテナッコ属 *Apolemichthys*

シテナッコ属はシテナッコ1種のみ。

### シテナッコ *Apolemichthys trimaculatus* 普



屋久島では普通に見ることができる。浅いところにもいるのでスノーケリングでも観察できる。好奇心が強いのかスーと寄ってきてはさっと逃げてまたこっちを振り返るといふしぐさがとてもかわいい。青い唇をしたあの顔で見つめられるとつい微笑んでしまう。シテナッコは「四点」の意味だが、学名の「tri」は3つの意味で英名もスリースポットエンジェルフィッシュという。正確に数えるとおでこの点は二つなので「四点」が正しいのでは。もしかして海外産はおでこの点がつながっているのだろうか。

## スマレヤッコ属 *Holacanthus*

スマレヤッコ属もスマレヤッコ1種のみ。

### スマレヤッコ *Holacanthus venustus* 稀



個人的にはキンチャクダイ科で最も好きな種。しかし、個体数は非常に少なく出会えるといふ追い掛け回してしまいが、神経質でなかなかいい写真が撮れない。サンゴの多い岩場で、水深10m以深で見かける。

## ニシキヤッコ属 *Pygoplites*

ニシキヤッコ属も1種のみ。

### ニシキヤッコ *Pygoplites diacanthus* 普



サザナミヤッコやタテジマキンチャクダイに比べるとやや少ないが普通に見ることができる。岩陰にいるので見つけにくいかもしれない。幼魚を何度か見たことがあるが、成魚より鮮やかで背びれ近くに斑紋もあるので熱帯の見慣れぬチョウチョウウオが流されてきたのかと思ったほどだ。

## アブラヤッコ属 *Centropyge*

アブラヤッコ属は12種とキンチャクダイ科の中では最も多いグループである。いずれも20cm以下と小型である。

### アブラヤッコ *Centropyge tibicen* 普



キンチャクダイ科の中では最も目立たない地味な種である。しかし、じっくり観察してみると腹鰭・尻鰭に黄色い飾りをつけたり、体後半に蛍光色のブルーが入っていたりとそれなりにオシャレだ。体の中央にある白い斑は少し雑でいただけなが、ハーレムを作るといふがオスもメスも区別がつかないのでよく分からない。群れの中での相対的な体の大きさで優位が決まるようだ。

## ナメラヤッコ *Centropyge vrolicki* 普



アブラヤッコに次ぐ地味な奴だが、前半分を白っぽくしたツートンカラーで目の周りにオレンジのアイシャドーを入れた色っぽい奴。クログチニザの幼魚がこのナメラヤッコに擬態するというが、何の意味があるのだろうか？岩礁域ではお馴染みの種である。

### ヘラルドコガネヤッコ *Centropyge heraldi* 少



しばらくこのヘラルドコガネヤッコの存在に気が付かなかった。モンツキハギの幼魚とそっくりで幼魚の姿のままずっと大きくなるものだと見ていたら、モンツキハギの幼魚はもうこのサイズではツートンカラーに成りかけているはず。じゃあツートンにならない奴はどうしたんだと良く見てみると目の周りに隈まで作っている。よっぽどお疲れなのかと思

ったらなんとこのヘラルドコガネヤッコであったというわけ。また、クログチニザの幼魚も黄色くなってヘラルドコガネヤッコに似るといふ。ニザダイの仲間とアブラヤッコ属の仲間の間にはいったいどういう関係があるのだろうか？

### ソメワケヤッコ *Centropyge bicolor* 少



学名の「bicolor」は「二色の」という意味、二色に染め分けたヤッコである。私の好きなスマレヤッコも同じ黄色と青の2色であるがこんなにケバくない。スマレヤッコの方が品が感じられる(独断評)。遠くからでも良く目立って、近づくとペアでわざと仲の良いのを見せ付けるように逃げ惑う。「奴が来て俺が君を守って見せるから」「はい、私はあなたの後をどこまでも付い

て行きますから」と言ったかどうか！

### アカハラヤッコ *Centropyge ferrugatus* 少



ブルーの縁取りに控えめな赤い腹と繊細な斑点のつけ方はいかにもアカハラヤッコの繊細さを表しているようである。隠れ場所の多い岩場を住処にしているのでちよろちよろと岩の中に入り込んでなかなか写真を撮らせてくれない。ここから出て来るとじっとカメラを向けて待っているとずっと向こうの方からこっちの様子を見ていたりする。小憎らしいけどかわいい奴だ。

## 終わりに

さて、屋久島で確認されたキンチャクダイ科の7属13種を紹介したが、実は、気になるのはここに登場しなかった種である。

アカネキンチャクダイ・チリメンヤッコ・ロクセンヤッコ・ワヌケヤッコ・アデヤッコ・ルリヤッコ・シマヤッコ・ダイダイヤッコなどの熱帯系の種が見られないのは納得がいく。そのうち潮に乗ってやってくることもあるだろうと思う。しかし、キンチャクダイ・キヘリキンチャクダイ・アカネキンチャクダイ・オハグロキンチャクダイ・チャイロキンチャクダイ・レンテナッコなど比較的温帯域に適した種が屋久島にいないのはどういふことだろうか？さらに、キンチャクダイ属のキンチャクダイ・キヘリキンチャクダイ・アカネキンチャクダイの相模湾以南(沖縄を除く)、台湾、朝鮮半島、中国、香港が分布域となっている。なぜ、屋久島を含む沖縄がはっきり分布域から抜け落ちているのだろうか？私は、もしかしたらこれらの種がサンゴの多い沿岸の浅場を避けて、少し深い所にいるのではないかと密かに思っている。今年は少しディープなダイビングをしてこれらの謎を解き明かしてみたいと思う。

# 海の中のお花畑♪

浜崎 ひろみ

それはまるで、海の中のお花畑♪ 堅くて丸っこくてピンクがかったハマサンゴの表面にパツと咲き乱れている…かの様である。一つの花…みたいなものの大きさは直径約3cm。赤・青・黄色・桃色・水色・橙色、山吹色、深緑、青緑、もう一体何色あるのっ？さらに紫から青へ、橙から赤へなどとグラデーションがかったコジャレタ輩もいるではないの。とにかく本当に美しい！綺麗なものには触れたいくなる？！そのお花畑を目にした人は大抵そっと手を伸ばす。すると、シュポッ！花の根元の奥、サンゴの中へ引っ込んでしまった！ビックリ！「おおっ！花ではないの!？」その通り。それは正真正銘『動物』なのだ。

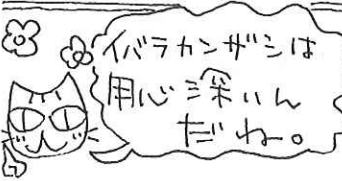
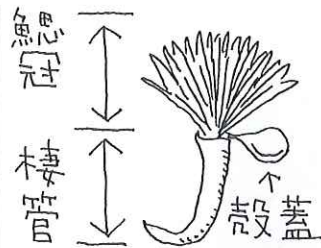
その動物の名前は『イバラカンザシ』。なんとゴカイやミミズの仲間なのだ。似ても似つかないその姿…。しかし体の大部分はサンゴの中に隠れている。左の図(イバラカンザシの体の構造図)をご覧あれ。

海の中で見えている花の様な部分は上部のヒラヒラした所。この器官は鰓冠(さいかん)と呼ばれる、実は『鰓(えら)』なのだ。じっくり観察すると微細な繊毛が見える。この繊毛で水流を起し、呼吸をしたり、プランクトンを濾しとって食べたりする。

また、鰓冠の各鰓軸にそって7~15対の眼点があり、鰓冠全体で光を感じることができる。自分の身の上に危険が迫ると目にも止まらぬ早業でシュポッ！と管の中に隠れてしまう。さらに隠れた頭の上にパツと石灰質の丸い蓋をするという徹底防御体制っぷり！体を縦に走っている太い神経繊維のお陰でナント人間の100倍もの速さで反応することができる。これにより弾丸をシュッ！と避ける様な早業隠れ術が可能になる。まるでマトリックスの世界です(笑)。鰓冠は1回引っ込んだらしばらく表に姿を現さない。中々用心深いのだ。

ミミズの様な体は下部の細長い部分。この体は棲管(さいかん)という防具に包まれている。棲管+体はサンゴの中に埋没しており、まずお目にかかることはできない。棲管の周りにはさらに堅いサンゴで覆われている。例えるなら、サンゴの中に試験管が埋まっていて、その中にイバラカンザシが住んでいる…というイメージだ。棲管はサンゴという強靱な堅い壁で守られた、いわば『鉄壁の家』である。それではこの家がどうやって建築されていくか、イバラカンザシの成長を追ってみよう！

イバラカンザシは岩の上でも見かけることがあるが、生きているハマサンゴ類の上に住むことが圧倒的に多い。生まれて間もないイバラカンザシの幼生はフワフワと水中浮遊生活を営むプランクトン。やがて大人の体へと変態が始まるとこれから長い一生を営む『定着場所』を決定せねばならない。そして幼生が選んだその場所





は一度定着するともう動けない。なぜなら浮遊生活時代の〔泳げる体〕が変態の為消滅してしまうからだ。定着場所を決めるのは真剣勝負！そして幼生の本能なのか？どうやら選択的にサンゴの上に定着するらしい。むむむ…幼生は岩とサンゴをどうやって区別しているの？

サンゴの上に無事定着した幼生。これからは自らの成長とともに、自分が安全に暮らす為の家を早急に造らねばならない。体からネバネバ〜と粘液を分泌しては細長い体の周りに膜をはるような感じでせっせと管をつくっていく。この管が『棲管』である。その一方、イバラカンザシに引付けられたサンゴの方も、ゆっくりと棲管を取り囲む様に成長し続ける。自分の『家』がじわじわとサンゴに覆われていくのである。そして、あわよくば最終的に棲管はサンゴの骨格中に埋没し、色彩豊かな鰓冠のみ海中にその姿を現すこととなる。ついに『鉄壁の家』をゲットだぜ！とイバラカンザシがほくそ笑んだかどうか…?!

海の中では食う！食われる！生きるか！死ぬか！そしていかにして子孫を残すのか！！…というそれは激しい生存競争が繰り広げられている。天敵の多い海中で自由に泳いで逃げられない代わりにイバラカンザシは鉄壁の家をつくる。これが彼等の『身を守る術』。その防御体制を攻略する術を私は持たない。ん〜まいった！

しかしブダイの仲間はサンゴの大敵！オウムの様なすどく頑丈な口で堅いハマサンゴ類をガ〜リガ〜リとかじる！水中でもそのガリガリ音は聞こえます…

私が観察した限りでは立派なサイズのイバラカンザシがハマサ

ンゴ一面に華々しく咲き乱れていると天敵ブダイの捕食が少ない様に見える。一方、ガリガリと表面を隈なく削られたハマサンゴにはイバラカンザシの棲管はあまり見当たらないようだ。これは何を意味しているのだろうか。

これに関して、今、私が最大に疑問なのはイバラカンザシの色。たった1種類のイバラカンザシなのになんでこんなに色のバリエーションが必要なの?!

もし色彩鮮やかな鰓冠がパッと開いている時に、ブダイがハマサンゴへのガリガリ攻撃を避けたら、イバラカンザシがサンゴのポリプの生存率を上げることに貢献していることになるけれど…私的には女性が自分の性をアピールする手段としてお化粧をしたりして自らを美しく見せようとする様に、イバラカンザシの鰓冠の美しい色も誰かに見せる為にたくさんバリエーションがあるのだと思いますが…この色でブダイを威嚇???まだ誰も答えを知らないこの疑問。あなたは どう思いますか？

#### 参考文献

- ・週間朝日百科 動物たちの地球 63号
- ・日本海岸動物図鑑 I 保育社

#### 《余談》

イバラカンザシが死ぬと空の棲管が残る。うまくしたもので、空いた家には別の住人『カンザシヤドカリ』が宿を借りることもある。また、ギンポなどの小魚がチャッカリ入り込む事もある。海の中では無駄がない。もっちりたれず…なのである。



2001年度  
MCC三岳クライマーズクラス  
の記録

小原 比呂志

三岳クライマーズクラブ。略してMCC。昨年誕生したばかりの山岳会である。牧瀬一郎と小原比呂志を中心に屋久島在住という地の利を生かして、この魅惑の土地を探りぬこうという意欲に満ちた集まりだ。(三岳喰らいまーの集まり…というわけでもない)基礎から始めるのが楽しいのだ!という弱小チームではあるが、ここでこの一年間の活動から、いぶし銀の記録をいくつか紹介しよう。

① 荒川支流石塚小屋谷～安房川南沢源流(1～2級)

2001. 4. 21～22.  
牧瀬一郎、池田祐子、寺田史人、渡部大志、持原道子、小原比呂志

MCCの記念すべき初山行である。初めてのことであり、美しくめだたい谷がよからうということで、美渓として知る人ぞ知る石塚小屋谷をコースに選んだ。折りから屋久島は前線の影響で大雨が近づいており、さて、どうしよう?という状態で入山した。

7:00屋久杉自然館駐車場に集合。沢登り初めてのメンバーもいるので、装備を念入りに確認した後、出発した。

入渓予定の淀川林道1200m

「ぐるり」はすでに雨。淀川登山口まで入り、とにかく石塚小屋には行くことと決めて9:20歩き始める。ところが淀川につくと、本流はまったく増水しておらず、いつもの通り美しい。勝手知ったる淀川である。やっぱり増水してもいいから計画どおり谷に入ろうや、ということで、ここから下降して石塚小屋谷出合に向かうことになった。空は暗いが美しいナメの続く流れをゆく。12:35出合あたりで雨が本降りになり、水量が増えてきた。最初の10m滝を右から巻いたところでうっかり牧瀬チームと小原チームに分かれてしまい、お互いに所在がわからなくなる。

渡部と牧瀬の無線で連絡を取り合い、やや上流で合流することができた。無線の威力である。増水した谷をざぶざぶとゆく。ほんとうなら庭園の様に美しい谷を愛でながら、MCCの将来を語り合うはずだったのだが、水っぽい1日になってしまった。15:40水場の谷出合、18:20登山道。やけに時間もかかった。貸し切りの石塚小屋では全員がやはり夜の「三岳喰らいまー」となり、遅くまで親睦を深めたのであった。

4月22日

怒涛の昨日とは打って変り、すがすがしい朝となった。のんびりしてから、南沢に向けて9:30出発。

10km峠から旧登山道を下り、美しく輝く小滝沢の水場から、10:15本流に降り立つ。ここから投石平まで、短いが美しく楽しい谷である。小廊下滝を突破し、谷をふさぐ大岩の下をくぐり、美しいナメの感觸を楽しむ。

途中、青々とした小淵で渡部がカップを落としてしまった。MCC発足にあたって取り寄せた、チタン製である。少し考えて心を決めた渡部は、ハーネスと沢装束を脱ぎ捨て、水深2mの淵に潜り、全員が固唾をのんで見守る中、みごとおニューのマイカップを手にも浮上してきた。彼は、そのままカップでよく冷えた沢水をぐくぐくと飲み干し、満面に笑みをたたえて見せたのであった。

源頭のルートファインディングが分かりにくかったが、13:30投石の黒滝下に到着。春の日差しの中、のんびり淀川に下った。

このコースは本来、極楽の様に美しく短い、入門者超お勧めコースのはずだったのだが、大雨コースになってしまった。まあ地元にいるとどうしても日和見主義になりがちなので、たまには(しょっぱなから)こういう展開もいいのだ。

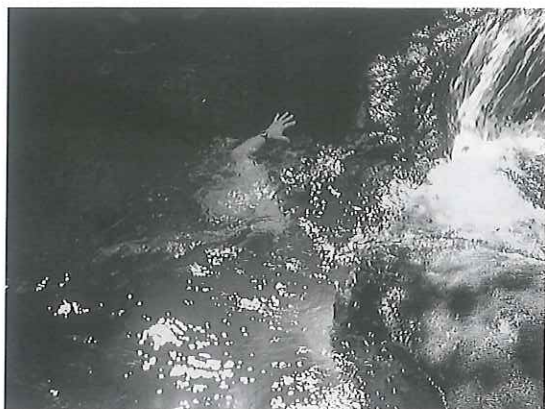


南沢の小滝をスリングで登る寺田



南沢源頭は投石平。左奥に黒味岳が見える

チタンカップを回収しようと、水没する渡辺



取り戻したカップで飲む水は、冷たくうまい！



## ② 安房川支流太忠川（2級）

2001. 5. 9-10.

池田祐子、持原道子、小原比呂志

太忠川は、石塚山と太忠岳の尾根に囲まれて、深い森の中を静かに流れる狭い谷である。安房川の流域で、この谷の周辺だけは細々と特別天然記念物など自然保護地区として残されたため、今なお深い巨木の森を経験することができる。

5月9日 縄文杉登山で車が満杯の荒川登山口になんとか愛車を押し込み、10:30出発。早朝は混み合う荒川口も、時間をはずせば静寂の山だ。

太忠川出合（標高620m）から、山道に入る。屋久杉ランドもまだ存在しないころ、このあたりには屋久杉見物のための遊歩道があったらしい。二股から中尾根にあがって「ジトンジの大杉」を見に行く。あいかわらず大きな木だ。根元をくぐり、その上の軌道跡を左へたどって、左股の本流へ降りる。

屋久島らしい苔むしたゴーロの平凡な流れだか、こういう淡々とし

た谷は、動きになじむためのトレーニングにいい。いくつかナメ滝があって、早速、持原が滑り台にしている。このあたりは小杉谷時代に伐採が入ったところなので、倒木やその破片がものすごい。ワイヤーやトロッコのレールが捨てられている。うろついているうちに、朽ちたインクライン（仮設のトロッコ道）跡を見つけた。17:30、やっと良いところを見つけてツェルトを張る。標高920m。岩も木立も巨大な倒木も分厚いコケに被われ、白谷風のモスフォレストだ。

5月10日

6:00起床。雨がぱらつくが、木の間隠れになんと天柱石が見えている。しばらく巨岩帯をゆくと右に超巨大岩屋が現れた。沢に面しているので泊りは難しいが、とにかく大きく、差し渡し20mを越えているようだ。これが天柱石の片割れだといわれたら信じそうである。岩屋の奥には、石を並べて作った小さなベンチが残っていた。伐採作業の休憩場になっていたのだろうか。雨が

降り続けている。ぼくもここで小休止。

このまま平凡に稜線に抜けられるかなあ、と思いきや、ここからがそれなりの核心部であった。まず、巨岩の上、巨大倒木を過ぎると、高さ15m程の素晴らしい一枚岩のナメ滝が現れた。続いて2段12mと、目がさめた様に滝が出てくる。

これを越えると、がぜん屋久杉が増えてきた。どうも伐採跡地を抜け、原生林に入ったらしい。屋久杉ランドと同程度の素晴らしい森だ。大滝こそないが、それなりに面白い滝が続く。2箇所ほどザイルを使って通過する。左からの支流を入れると、再び巨岩帯となり、谷と岩と木とコケがごちゃごちゃに混乱した様相になる。

真横の高みにいきなり天柱石が見えたので、現在地を正確に確認できた。水流に忠実に進み、石塚方面への流れを分けて、太忠の稜線を目指す。見なれた登山道に出たのが14:00。天柱石の台座でしばらくのんびり写真を撮ったりして、あとは屋久杉ランドに駆け下った。



太忠川はコケの世界だ。オオミズゴケの巨大なモスボールを見つけて喜ぶ小原



滝は少ないが美しい。ナメ滝で滑って遊ぶ持原

### ③ 大川ノ滝左ルート

IV+, 全長100m 3ピッチ  
2001. 10. 2.

池田祐子、持原道子、小原比呂志

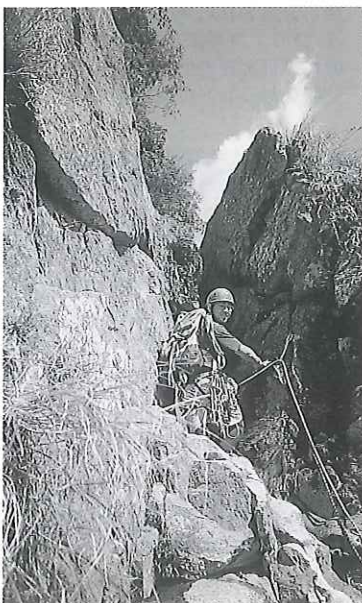
見たところ大川ノ滝の左はじっこを登るルート、という感じだが、登ってみるとどうしてどうして、滝の核心に行く感すらある、いいルートである。

左の大テラスを12:30登攀開始。ロープの流れはいいが、懸垂のことを考えて9mm50m×2本をツインロープで使用。

1ピッチ目 4級+ 40m  
このピッチは、9月に岡田愛、鷲尾紀子、伊藤千賀子、小原の4人で試登済み。ルートは見ればわかるはっきりしたライン。大まかなリッジから滑りやすい流水を左上(4級+)してチムニーに入る。残置ハーケンが4本ほどあるが、腐っていて使う気にはならない。小サイズのカム(トランゴ)がよく効く。テラスに着き、前回の試登の際打っておいたハーケンでビレイ。

2ピッチ目 3級- 30m  
一段上に上がり、白く磨かれた広いバンドを伝う。ガリーの中にアコウが根を張り、これを使って登る(3級-)。きれいなクラック(というか流水溝)にカムを2つ決めてビレイ。ここから見下ろすと、ものすごい瀑流ごしに滝壺が見え、ギャラリーがイモ洗い状態。素晴らしい展望台だ。

3ピッチ目 3級+ 20m  
滑りやすいチムニー状を登る。傾斜は緩い。適度にクラックがあり、カムが決まる。なかなかの高度感を感じながら、落ち口まで登ってビレイ。



3ピッチ目のチムニーを登る小原

眺めは最高で、いい気分である。しかしこのあとが核心だった。大川はやや増水気味で、落ち口を渡るのが困難になっていたのだ。さらにザイルを伸ばしてこれをなんとかわたり終え、登攀終了。左岸の急な樹林帯を降りる。

1ピッチ目終了点のビレイポイントにハーケンを1本残置した以外は、ほとんどカム類でビレイをとれる。美しい岩と豪快な水流、素晴らしいロケーション。最近では出色の楽しいルート。手ごろな初級ルートの少ない屋久島では、貴重な1本だ。



2ピッチ目の持原。水流のはるか下に滝つぼが見える。



落ち口に達して嬉しそうな持原



一難去ってまた一難。水量の多い落ち口を渡渉する小原

書評：「地球遺産 最後の巨樹」吉田繁・蟹江節子

2002.6.6. 講談社、¥3800.

多少のことには驚かない私だが、この本には心底驚いた。巨樹を求めて地球中を歩いた吉田繁+蟹江節子の渾身の大作である。ついにベールを脱いだ感のある台湾の巨大神木群や、ドワーフの大群が出てきそうなイングランドのイチイ etc. 紹介するのももどかしい。とにかく、この通信を手にした方になら、自信を持って請合おう。絶対お薦めである！(小原)

# 宮之浦川ちよつと上流

持原道子

“トロッコ道” これを聞いてすぐに思い浮かべるのは、荒川登山口からの縄文杉ルート、てくてく、テクテク、てくてくてて……歩き続ける軌道だろう。これは、切り倒され集められた丸太がトロッコに載せられ、安房の港まで運ばれる道であった。これとは別の場所、あまり知られてはいないが、宮之浦でもかつてトロッコは走っていて、高塚山と羽神岳の谷から宮之浦川の上流へ向かい、現在の屋久島環境文化村センターのある場所まで軌道が続いていた。

これらの作業の拠点では、作業人夫とその家族達の生活が営まれ、集落内には学校もあった。荒川の小杉谷には大正13年から昭和45年まで続いた小杉谷小中学校が、宮之浦の町から上流8kmのところには、規模が小さいながらも宮之浦小学校岳分校が昭和14年に設立され、昭和39年まで子供たちの学びの場となった。

そしてもうひとつ、この地区には林業学校もあった。

江戸時代、年貢として収める平木をとるために始まったスギの伐採であるが、元来島民にとって山は神様がいる恐れ多い場所であった。よって、山仕事で生計をたてるという産業は馴染みの薄いものでその術が磨かれることもなく、九州、四国から山師や人夫を呼び集めて伐採作業を進めていた。しかし、これでは地元の人間が育たないし来ってもらうための費用もかかる。また、委託林の指定も受けていたので、島民を林業技術者に養成し事業を発展させようと設立されたのが、「上屋久林業修練所」であった。ここでは、短期で六ヶ月、長期で二年の間、伐木や測量以外にも造林、製材、製炭などの学科と実習が訓練された。

このにぎわいはいったん静まったものの、



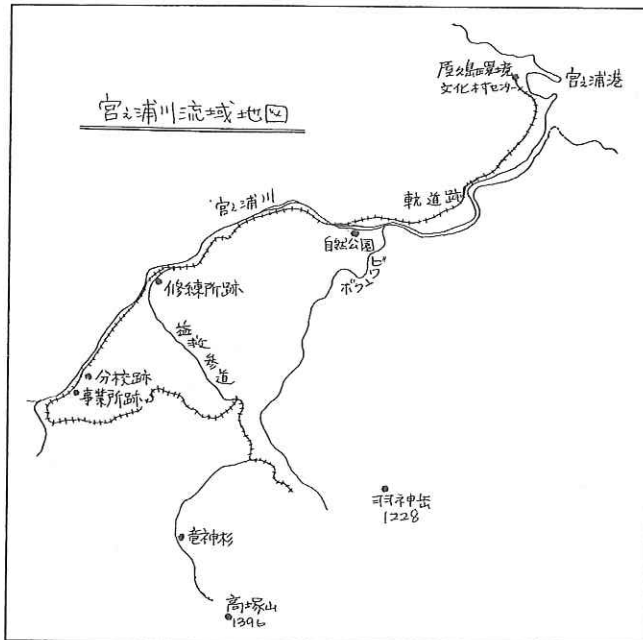
集落跡の風呂釜

宮之浦川上流域の活用計画が上屋久町によって現在進められている。

そのうちの一つに、“益救参道(やくさんどう)”の登山道整備事業がある。

宮之浦川沿いの神之川林道からピワンクボと名のつく谷沿い上流へ向け、一旦は廃道になってしまっていた道が復活しつつある。

2002年5月、自然倶楽部のメンバー8名は、この歩道を竜神杉まで歩いてみた。白谷雲水峡のコース内でおなじみ、石段になっている楠川歩道の手法をもとに、下から一段一段花崗岩が積み重ねられている。極



めて丁寧に、細かく段が積み上げられているので、歩きやすいし見栄えもいい。苔むす石量になるのがとても楽しみ。また、使われている楠川歩道のものより大きめの花崗岩は、15m以内から探して運び、作業は人力で進められているという徹底ぶりには脱帽する。今回のルートは目的地まで標高差1000メートルほど。作業場跡や炭焼きがまを横目に登り、苔に覆われたトロッコ軌道を15分ほど歩くと、急斜面にジグザクにつけられ続く石段。これを一段一段ひーこら登っていると、我らを待ち構えていたのは雨上がりの元気なヒルたち。次から次に出没するので、ゆっくり腰掛けて休むこともなく足を運び続けた。

いやしかし、こんな潤う森だからこそ、ヒルもスギも良く育つのだろう。

伐採後に生えてきたような細い木々の中にまず現れたのは、朽ちるということを知らぬがごとの大きな切り株だった。次には竜



石積み歩道

神杉が、そして辺りにも迫力あるスギが数本見つかった。

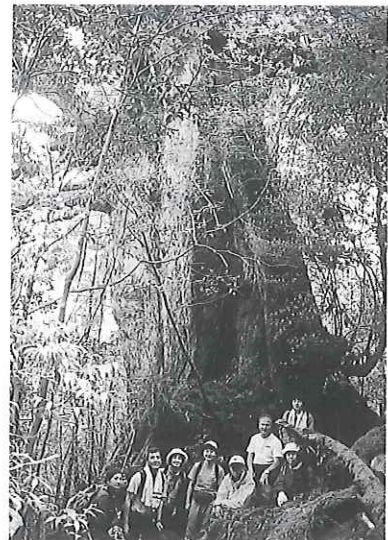
1本1本確認するように見て回ると、かつての巨木林の姿が偲ばれ、ただただ黙って目の前の巨大なスギを見上げてしまった。

竜神杉までの参道は、今年中に完成予定。落葉樹も多いところだったので、次回はヒルも鎮まる紅葉の季節に行ってみようか。

史跡、歩道、巨木とヒル、宮之浦の町から少し移動するだけの川沿いエリアは、まだまだ面白い探索ができそうだ。

参考にした資料:

- ・生命の島32号
- ・屋久杉の里 南日本新聞屋久島取材班
- ・自然に親しむ集い 宮之浦川上流域探勝資料 上屋久町
- ・益救参道整備計画 上屋久町



竜神杉の下で

## Calendar

2002年

- 1~5月 市川 屋久島一般廃棄物処理施設検討委員会委員  
1/6~27 藤村・岡田 ニュージーランド研修  
1/19 松本 屋久島高校で「自然ガイドという仕事について」講義  
1/27 自然倶楽部 第1回 西部川原の森歩き  
1/31~2/2 松本他4名 上五島エコツアーズ調査  
2/16~24 市川 第2回風の大き空タスマニアツアーガイド  
2/17 自然倶楽部 第2回 雨天ロープワーク講座  
2/23~24 松本他4名 アマチュア無線講習会を受講し免許取得  
3/3 松本 地球環境市民大学で「屋久島の海洋生物」スライド講義  
3/4~12 松本・市川 インドネシア・スラウェシ島ツアー下見  
3/14・15 松本 高知フィールドミュージアム推進事業はた・エコツーリズム・セミナーにて講演  
3/10 小原 自然に親しむ集い・西部林道講師  
3/19 安房川でカヌーツアーを行う業者による安房川カヌー会発足  
3/31 自然倶楽部 第3回 三種神杉  
4/1 松本拓海 名古屋の大学に入学。CGを学びハリウッドを目指す。  
松本海生 屋久島高校入学  
小原萌衣 宮浦中・市川暁介 安房中入学・小原実太 宮浦小入学  
4/14 自然倶楽部 第4回 小杉谷から愛子岳へ  
4/16~20 松本 韓国のエコツーリズムフォーラムでパネリスト  
4/17~22 小原 キャンピングガイド講習会受講(岐阜)  
5/13・15 小原 宮浦小で総合学習の授業  
5/19 自然倶楽部 第5回 益久参道から竜神杉へ  
5/23~27 鷲尾 リバーレスキュー講習受講 SRTレベル1取得  
5/24~28 小原 関西キャンピング研究会に参加  
5/26 松本 自然に親しむ集い タイドプール観察会 講師  
6/10・11 自然倶楽部 第6回 口永良部島へ  
6/10~16 鷲尾 ウミガメ調査ボランティアに参加(永田田舎浜)  
6/23 松本・宏美 「屋久島の海辺生物ガイド」刊行記念観察会講師  
6/30 自然倶楽部 第7回 元浦スノーケリングとバーベキュー

## Library

執筆記事

- ★「助産婦雑誌」2002.3 屋久島の自然を思う (松本) 様々な分野で屋久島を語り、執筆活動が忙しい松本社長が、ついに“人間の誕生”をつかさどる雑誌で筆を執る。
- ★「別冊太陽 日本の秘境」大内尚樹編 平凡社、2002.5 「宮之浦川」(小原) 国内の、極めつきの秘境を紹介する硬派ムック。凄く所はあるものである。小原もちょっと書かせていただいたが、かなり以前の記録をもとに書いたこともあって迫力不足の感も否めず。
- ★日本の森 ガイド50選 山と溪谷社 2002.6 「屋久島の森」(小原) 白谷を紹介。といっても、編集部が作った原々稿に手を入れただけだが、これはBSで放映された「日本の森」のビデオ化に伴い出版されたもので、恥かしながらビデオにも登場しております。
- ★屋久島環境文化財団「屋久島の海辺生物ガイド」(屋久島ガイド連

## Contents

ウミガメの脳・イルカの脳	1
ニュージーランド紀行	2
おたまじゃくしがカエルになるまで	7
屋久島のキンチャクダイ科の魚類	8
海の中のお花畑	10
2001年三岳クライマーズクラブ活動報告	12
宮之浦川ちょっと上流	15

絡協議会海洋生物研究会 松本・浜崎 屋久島の沿岸生物のフィールド図鑑。非売品だが文化財財団の会員になるともらえるらしい。

★「環境会議」2002.7 特集 共生—今行ってみよう！新しい発見の旅エコツアーズ 持原がYNACのツアーの魅力を紹介。

掲載記事

- ★「ナトラ」2002.3 森でよみがえれ—今年こそ屋久島へ 松本が紹介されています。
- ★「旅」(JTB2月号)／特集 水の小宇宙 屋久島 秋月岩魚さんの美しい写真と平野肇さんの優しい文章によって白谷雲水峡への遊学をお薦めしています(松本・藤村登場)
- ★「felia」南日本新聞 5/15号 若い女性の目から見た屋久島の観光ポイントを紹介。YNACも紹介されています。

## 編集後記

- 海洋生物研究会でとうとう屋久島の魚類リスト作りには手を出してしまっただけ。これは一生私に付き纏うかも。7月1日オープン予定。  
<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~ynacmatu/> (ま)
- 梅雨の時期に屋久島に来て今年で4年目。梅雨の雨もまたよし(さ)
- 大分の黒岳に少しだけ踏み入った。こことは違う明るく爽やかなかった。(も)
- 漂流物学会の中でこの度「浮き」だけを研究する「ウキウキ研究会」が華々しく設立された！今、「浮き」がアツイ！！(ひ)
- 古家ですがつい一軒屋を借りました！ところが梅雨の豪雨でなんと床の間の壁が崩れ落ちてしまいました。果たしてこの家は台風を切り抜けられるか？(わ)
- 御気楽見習い1年生。新米ガイドの2年生。貫禄つけたい3年生(あ)
- 雲も山も森も、全ては谷に流れ込む。核心は溪谷にある。(お)
- 屋久島の銘水と上五島の伝統が融合し、「屋久島銘水うどん」が生まれました。めっちゃめっちゃ美味い！(い)

表紙写真：みざる、きかざる、「いざる」

## YNAC通信(ワイナックつうしん) 第15号

発行日：2002年7月1日

発行：(有)屋久島野外活動総合センター

住所：〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com Url: <http://www.ynac.com/>